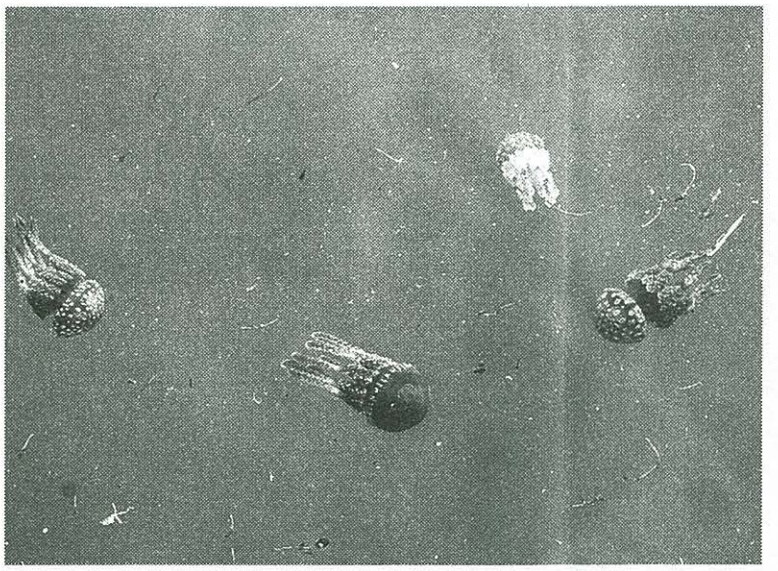
紀伊民報
2010年(平成22年)12月5日 日曜日 第20457号 (10)

田辺湾はクラゲ天国

90年で150種 京大実験所が調査

白浜町臨海の京都大学瀬戸臨海実験所は開所以来約90年、田辺湾とその周辺に出現するクラゲの分類と生態を中心とした調査研究を伝統的に続けている。その数はこれまでに150種以上になり、新種も9種記載した。クラゲ研究を35年間続けている久保田信准教授は「この海域で出現するクラゲの種数は日本一多い。生活史を解明した種も多く、日本で最もクラゲ類の研究が進んだ海域と言える」と話している。



紀南地方では夏場おなじみのタコクラゲ（白浜町瀬戸で）

同実験所は1922（大正11）年に京都帝国大学理学部付属臨海研究所として創設。37（昭和12）年に付属瀬戸臨海実験所と改称されて初代所長となった故駒井卓教授や初代幹事の故川村多実二教授らに始まり、5代所長の故内海冨士夫教授、7代所長の故時岡隆教授らに加え、海外の研究者が来所してクラゲの調査研究を続けてきた。ここ18年は、久保田准教授とともに、元京大院生の河村真理子博士（現・水産大学校契約職員）や元京大助手の田名瀬英朋さんらがまとめている。

今年までに150種以上を確認した。その中には未同定種も多く存在しており、さらなる新種の可能性もあるという。一般によく知られる種類は、大型の鉢クラゲの仲間のミズクラゲやアカクラゲ、帆走性で青色のギンカクラゲ、カツオノカンムリ、カツオノエボシなどの大型のヒドロクラゲ類。小型のヒドロクラゲ類では、不老不死として注目されるベニクラゲや逆に早死にするカイヤドリヒドラクラゲなどが多く出現している。

田辺湾産の標本を基に記載した新種9種の中には、他の動物と共生するヒメサカナヤドリヒドラやカニウミヒドラなどがいる。最近では久保田信准教授と河村博士がブイヨンケリカークラゲを新種記載した。新種以外では、2005年にエチゼンクラゲのような珍客も一度きりだが出現している。

◇

来週から週1回、久保田信准教授が各種クラゲの不思議を紹介する「日本一のクラゲ天国 田辺湾」を連載します。